



TITLE:

<書評> 日本統計索引編集委員会：  
河島研究事務所編日本統計索引

AUTHOR(S):

前田, 昇三

---

CITATION:

前田, 昇三. <書評> 日本統計索引編集委員会：河島研究事務所編日本統計索引. 経済資料研究 1976, 11: 63-66

ISSUE DATE:

1976-07-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/79703>

RIGHT:

## 日 本 統 計 索 引

日本統計索引編集委員会 編  
河 島 研 究 事 務 所  
日外アソシエーツ（株）東京  
昭和50年11月刊

前 田 昇 三<sup>\*</sup>

社会集団における個別の諸現象に対する解明、また諸機関の諸々の政策の策定に必要な統計情報についての需要は緊要でありしかも増大化している。多くの人々は統計データの構造を調べデータの妥当性を求めるために、また最も必要とする統計資料の検索、統計データの管理などに多くの努力を払っている。この努力は、膨大な統計情報から精度の高い統計値を速く得ることをその目的とするところであろう。統計利用者の多角的な要求に対して参考資料の存在は、その要求をもっとも至近距離的に接近できうる tool として必要とされるものである。

しかし、わが国は、イギリス、アメリカ、ドイツなどの諸国に比し、統計索引など Index の編集・公刊の歴史は浅く昭和34年に至って国立国会図書館・専門図書館協議会の編集による「日本統計総索引」の刊行を見たが、今回刊行された「日本統計索引」（以

下『統計索引』と略す）の「はしがき」にその刊行の意図として、昭和34年以降の「…欠落を埋めることを目指している。」また、「…統計利用をいっそうすすめる手段の一つとして最近の統計資料に基づく細目索引を提供することを意図」して編集されたとし、『統計索引』の利用対象は、「統計専門家や調査のベテランに限らず、ひろく一般の人々が統計資料をたやすく見つけ出せることを目途としている」と述べている。Index の不備なわが国で約2,000頁に及ぶ『統計索引』の出版は、「はしがき」に述べる統計利用者の願望に答えるものであるといえよう。

× × ×

『統計索引』の「凡例」によってその内容を簡単に紹介すると

〔1〕索引対象 採録基準として現行の「指定統計調査」のうち継続調査されている79系列の調査結果を報告する公表資料。各省庁の統計要覧類と民間

<sup>\*</sup> まえだ しょうぞう 京都大学経済研究所

機関の特色ある二次統計資料。時代的関心高の高いと考える第一次公表資料（例えば「わが国情報処理の現状」ほか）を対象とし、そのうえ、利用可能性の高い統計資料を選定基準に加えその最近版（昭和47～49年版）の利用が図られている。

採録数は、上述の採録基準により統計資料数として144種450冊、それに収録する統計表24,000表からなっている。

〔2〕索引方式 『統計索引』は、統計資料に用いられている用語を正確に伝えることを編集方針とし、従って「統計資料の索引」を意図し「統計調査の索引」とは性格を異にしている。

「統計資料の索引」を意図した『統計索引』の索引単位は、統計表の表頭、表側にあらわれている事項―統計調査事項と分類項目―の双方を単位としている。

また、指示単位は、資料名と統計表のナンバーを指示して検索の便宜を図っている。

索引語は、統計表の表頭・表側に用いられた語に若干の調整を加えて索引語（主見出し語）としている。主見出し語は約5万語がファイルされ、例えば業務別、品目別等の統計分類が含まれているが、資本金別のように数量別、階層別、府県別の呼称は見出し語としていない。

参照として、同義語、類義語、上位・下位概念を示す語などの関連語がそのまま主見出し語として用いられてい

る場合もあり、そのため主見出し語と併せ〈参照指針〉として関連のある他の見出し語が示されている。

次に、主見出し語に続いて副見出し語を付し調査項目を示している。一例をあげると、索引語としての「陶磁器」の項目には、副見出し語としては、原材料・燃料・電力消費高、生産、出荷・在庫高、輸出高等を示している。

記入は、主見出し語の50音順で配列され、記述は、主見出し語と副見出し語で示された統計データ項目、内容項目、分類等統計の性格を規定する諸項目と、これに該当する資料名を記述している。

× × ×

ここで、ある統計値を求めるため二・三の設問をし、その設問に対して『統計索引』の利用によってどのように統計項目が検索され、統計資料情報が提供されるかを試みてみよう。

(1) 航空機の輸出入（額・高）（『統計索引』483頁に収録）の記述事項として「日本の統計」と「日本統計年鑑」を示し、この二誌に収録の貿易統計から主・副見出し語を選定している。しかし、ここで示された航空機の輸出入（額）は統計資料としての外国貿易概況と日本貿易月表（ともに大蔵省）から引用されている。しかも、『統計索引』に、貿易統計の基本資料としての「日本貿易月表」が収録資料として掲げられているが、その利用について明示した指示単位を見ることは出来な

い。そこで統計情報の速報性、統計精度を考慮すると、例えば「外国貿易概況」を加え、一次資料と、その付加的な内容を収録する統計資料を第一義的な索引対象資料とすることが望まれる。次に「時計」の輸出(1,175頁に収録)は、前述の航空機の輸出入を示した「日本の統計」「日本統計年鑑」を利用せず「東洋経済統計年鑑」を利用している。これは「日本の統計」(統計収録年:昭43~47年)、「日本統計年鑑」(昭30~45年)は、各々の収録統計年次のもとに重要(輸出)商品掲げ、その輸出額を示している。すなわち「時計」はその間の重要(輸出)商品として指定されず、同じく軽工業製品としての「テレビ受像機」は重要商品とされているが、それらの輸出額は「日本貿易月表」によるとほぼ同一額であることが判る。このような事例から、貿易商品の輸出入を示す場合は、前述のように日本貿易の基本統計資料による利用の統一化を図られることが望ましい。

(2) 工業生産に関する統計項目について試みるため、「自動車」(766頁収録)の出荷額について調べると、生産動態(生産、出荷、在庫)統計として機械統計月報、同年報の利用を指示している。わが国の工業に関する統計調査の基本は、工業統計調査、工業実態基本調査、生産動態調査であり、そのなかで工業センサスと称される工業統計調査=工業統計表は、わが国工業の

生産構造の調査による出荷額を通じて年間生産額を示すものであり、動態統計と併せ利用することによって統計利用の体系化を考えるべきではないだろうか。続いて「自動車」の副見出し語として〈輸出入〉〈輸出入額〉〈通関輸出入額〉(共に経済月報、東洋経済統計年報から)の語が約10アイテムにわたっているが、このことは統計利用者には、重出された副見出し語個々の意義が理解しにくく、ここでは、副見出し語の統一と利用統計資料の選定が配慮されるべきであろう。

(3) 農業統計では、例えば、農家世帯数を調べるためには、『統計索引』の索引項目から農家、農家戸数、農家人口、農家数がここで要求する主題に関係する項目と見做され、その個々について求めていくと

(a) 農家の項目では ①世帯員数、兼業種類別に示す資料「農家の形態別にみた農家経済」から、②経済組織別として世帯員、労働と記述し「年次農林省統計表」から

(b) 農家戸数の項目では、総数、構成比、専業・兼業別とし「経済要覧」から

③ 農家人口の項では、世帯員数とし、「農業センサス」から ④ 農家数の項目では、専業・兼業種類別として「日本統計年鑑」、「日本の統計」、「世界農林業センサス」を指示単位としている。

ここの評者は、農家世帯員数を調べ

るための手引として4項目に眼を通し  
そのうえ、どの項目が最も適当な事項  
かを判断することとなるが、この場合、  
農家調査の基本統計と補助的統計とを  
明確化することによって統計資料の選  
定がすすめられるものと思われるので  
ある。

すなわち、農家調査は10年毎に実施  
される世界農林業センサスと、その農  
林業センサスの中間年次における農家  
数、農家人口、農業労働力及び農業機  
械等の動向及農業経済の姿を総合的に  
把握することを目的として昭和35年以  
降毎年実施され、その報告は「農業調  
査結果報告書」として公開されている  
ことなどを考慮すると、収録資料とし  
ては、現在、上記統計資料と「世界農  
林業センサス」の二資料から統計値を  
得ることができるであろう。

ここで、収録統計資料について言及  
すると、「凡例」によると収録資料は、  
(1)指定統計を中心に②関心度の高い  
統計調査と公表する資料を主な対象と  
しているが、②を選定するについて、

編集時点における社会事象を反映する  
主要統計事項を収録した統計資料、例  
えば日本銀行の企業短期経済観測、国  
際収支統計、大蔵省の財政・金融統計  
(例えば財政金融統計月報)等の統計  
資料の収録が考えられてもよいのでは  
ないかと思われる。また、月報と年報  
とは収録統計項目に多少異なる点はある  
が、例えば経済統計月報と同年報、陸  
運統計月報と同年報のごとくほぼ同一  
の統計形式で発表される場合は、その  
一つの統計資料のみを収録するなど収  
録資料の記述内容による収録資料数の  
調整も図られるであろう。

しかし、多量の統計資料から広い利  
用者にもっとも適切であろうと思われ  
る資料を選定し、きめられた頁数に統  
計資料情報を集約する編集作業には種  
々の困難をともなうであろうが、いづ  
れとも編集目的をより明確化すること  
たとえば、統計調査の体系→統計資料  
の組織化→索引化といった観点からの  
統計資料論的な考察にもとづく編集視  
点から生れる統計索引が望まれる。

<追記> 『統計索引』(本篇)の書評を脱稿後「日本統計索引・補遺 国別・  
地域別篇」(436p.昭和51年3月)が刊行されたので『補遺篇』総目次にしたがって  
簡単に紹介すると、「日本統計索引・補遺 国別・地域別篇」の使い方、見出し語  
一覧(約1,000項目)、第1部 項目索引、第2部 収録統計調査報告書目次及び書  
誌事項、指定統計調査一覧、統計利用の手引き―統計関係参考書解題一、第3部  
外国統計利用の手びき、付録 日本統計索引見出し語一覧。

『補遺』第2部 収録統計調査報告書と付録は(本篇)よりの再録であるが、第  
3部は外国統計利用の参考書、邦文外国統計資料、各国主要統計資料リストを収録  
し、『補遺篇』に一つの特色を示すものといえよう。